

歴史的現在中の「とき」節と「と」節について

藤 原 正 道

英語コミュニケーション学科助教授

1. はじめに

本論では、物語文中の歴史的現在（以下 HP）の「とき」及び「と」節を when 節（以下 WC）と比較しながら分析していく¹。

HP は過去の出来事をあたかも今起こっているかのごとく、現在形を用いて表現する用法である。樋口(2006)では、HP は「物語のあらすじやシナリオの様に一定で imperfective であり、全体像を把握した上で単純現在によって描いたもの」としている。さらに「話の「構成」という静止画像的イメージではあっても、受け手の側で動画に転換されつつ、話が展開することが可能。つまり、言語表現としてはあくまで imperfective で静止画像だが、受け手の頭の中でイメージが動く」と述べている。

また HP は、過去形と過去形の間にはさまれた部分で起こると Wolfson (1979,1982) は述べている。しかし本論で引用した小説 Coetzee (1980) は物語全体が、そして村上 (2005a,b) では主人公「僕」の語る全ての章が、現在形で記されている。樋口 (2006) を当てはめれば、物語全てが静止画像となってしまう。もし仮にそうだとすると、読み手が物語の時間は前進していると認識できるのは、なぜなのであろうか。

本論では、現在形は読み手（＝聞き手）に語り手と同じ時間から事態を見るようにとの指示であるとする。一方、物語の時間の進行は次の(1)の要素から評価して、事態の開始点や終結点の明確性が高いほど時間が進み、開始点も終了点も不明確な場合は前文と同時となり、物語は進まないとする²。

- (1) a. 動詞の語彙アスペクト（動作・状態など）
b. 動詞とその項（動作主・被動者など）の関係
c. 時制（過去「タ」・非過去「ル」）
d. 相（have-en / be-ing・「テイル」）

- e. 動作主の意志性(意志的・非意志的)
- f. 肯定(肯定・否定)
- g. 叙法(現実・非現実)
- i. 時の副詞
- j. 時の接続詞
- k. 前文の事態の続く時間の長さ

HP は現在形で表されるため、(1c) の時制に関しては事態の開始点や終了点が不明確になる。しかし、(1)のその他の要素から事態の開始点や終了点が明確になり、読者は物語の時間が進行すると認識する。

なお、文体上の様々な要因を可能な限り排除するため、語り手が主人公である作品を例として引用した。

2. *when* 節

日本語では、「前文+とき・と+主節(以下 MC)」という統語構造のみ存在するが、英語の WC は「前文+WC+MC」と、「前文+MC+WC」の両方が存在する。そして WC と MC が同時を示すだけではなく、WC よりさらに MC の方が時間が進む場合や、MC より WC の方が時間が進行する場合がある³。

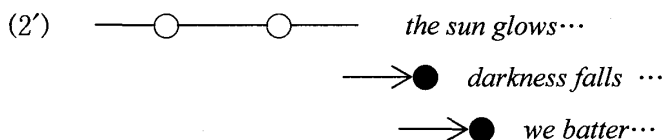
- (2) Through the river of dust that courses majestically across the sky the sun glows like an orange but warms nothing. When darkness falls we batter the tent-pegs into cracks in the rock-hard salt; we burn our firewood at an extravagant rate and like sailors pray for land.

(Coetzee (1980:60:下線は筆者による。以下同様。))

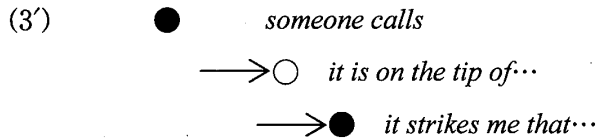
- (3) “Who is it?” someone calls. It is on the tip of my tongue to reply, to take the key out and wave it, when it strikes me that this act might be imprudent. (Coetzee (1980:99))

- (4) There is only a scullery maid in the kitchen. She gives a start when the two of us walk in, in fact even seems about to run away... (Coetzee (1980:87))

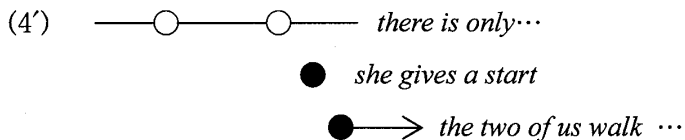
(2)の WC 中の *darkness* は動作主として意志を持たないので、事態の変化値は低い。しかしながら、*fall* は (1a) から終了点が明確になるため、事態が変化して前文より時間が進行する。そして、MC 中の *we batter the tent-pegs*...も (1a,b) から、終了点に意味の焦点が当たるため、事態が変化し、時間を進めている。(2)は下記のように図示される⁴。



(3)の WC 中の *might* は、(1g) から非現実性を表しているの、状態の変化値は低い。しかしながら、'when'の含意 'just after which'から、WC は MC より時間が進むので、次の (3') のように誰かの呼びかけに返事をして、鍵を取り出し振って見せようかと思ったが、無分別かと思ったという時間の流れになる。



(4)にも同様のことが言える。台所に皿洗いの女中がいる状態のところに私たち 2 人が入ってくると、女中が驚くという時間の流れになっている。WC 中の *the two of us walk in (the kitchen)* は、(1a,b)から動作の開始点に意味の焦点が当たり、開始点が明確となり、前文より時間が進んでいる。さらに、MC 中の *she gives a start* は瞬間的な動作なので、開始点も終了点も明確になり、WC より時間が進む。したがって、次のような時間関係になる。



以上のように WC はたとえ HP 中でも、MC と同時を示すだけでなく、時制以外の(1)の要素から事態の変化が生じ、物語が進行していると読者は認識する。

3 「とき」と「と」

3.1 「とき」節

「とき」節は(5)(6)のように HP にもかかわらず、「タ」と共に開始点や終了点が明確になる出来事の動詞が用いられる。一方、MC には「～いる」などの開始点も終了点も不明の状態を表す動詞が使われていることがほとんどである。

(5) 意識が戻ったとき、僕は深い茂みの中にいる。 (村上(2005a:140))

(6) 目が覚めたとき、彼女はもういない。仕事に出ていったのだ。 (村上(2005a:193))

全てが現在形で描かれる HP にもかかわらず、「とき」節中のみ「タ」が現れるのは、日本語が英語と異なり、相対的な時制を持つからと考えられる。

樋口 (2000) が述べているように、「タ」は事態の成立を後に、「ル」は途中又は前方に見せるという、方向性のマーカーであり、視点は発話時という固定的時点に限る必要がない。したがって、MC から前の事態として「タ」節の事態を見ているだけである⁵。

一方、英語の場合は語り手と事態との距離が一定である。(5) (6)の英語版では「タ」形の所に過去形が使われることはなく、以下のように現在形が使われる。

(5') When I come to I'm in thick underdrowth, lying there on the damp ground like log.

(Murakami (2005:86))

(6') When I wake up, Sakura's left for work.

(Murakami (2005:119))

このように英語と日本語は異なった時間的基準を持っている。

さて、上記の(5)の「とき」節中の「意識が戻る」は(1a,b)から事態の開始点が明確にされ、「タ」が共起することでさらに終了点も明確になる。よって、前文より時間が進行する。そしてMC中の「いる」は(1a)から状態を表し、開始点も終了点も不明確なので時間を進行させず、「とき」節とMCは同時となる。

(6)の「とき」節の「目が覚める」と「タ」は(1a,c)から事態の開始点、終了点ともに明確になる。また、MC中の「もういない」の「もう」という副詞と「いない」の否定から事態は「とき」節より前に生じたことになり、時間は進行しない。(5) (6)の時間関係は、それぞれ次のように図示される。

(5') ———→● 意識が戻った
——○——○—— 僕は深い茂みの中にいる

(6') ● 目が覚めた
——→● 彼女はもういない

次の(7)は村上(2005a,b)中で「とき」節に現在形「ル」が使われている、唯一の例である。

(7) 5時になって図書館を出るとき、大島さんはカウンターの前で同じ本を読んでいる。

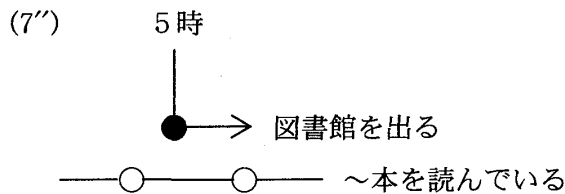
(村上(2005a:120))

(1c)から評価すると、「タ」形に比べて「ル」形は開始点・終了点ともに明確にならず、事態の変化が小さい。しかしながら、「5時になって」という副詞と「ル」形が事態を前方つまり、聞き手に事態をこれから起こることとして見せる働きを持つことから、(1e)の動作主の意志が具現化してくると思われる。したがって、開始点が明確になる。(7)の英語版では、(7')のように 'be about to' を用いて表現されている。

(7') When at five I'm about to leave Oshima's still behind the counter, reading the same book, his shirt still without a single wrinkle.

(Murakami (2005:74))

一方、MC には状態を表す「いる」が使われ、開始点も終了点も明確にならず、下記のように「とき」節と同時間となる。

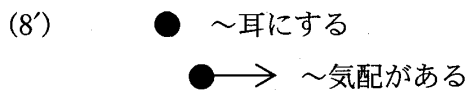


さらに、(8)の例を考えてみよう。

(8) その地名を耳にしたときに、彼女の瞳の中をなにかが横切ったような気配がある。

(村上(2005b:120))

「とき」節には「夕」形と「耳にする」が用いられ、(1a,b,c) から事態の変化値が大きいと解釈できる。一方、MC の「気配がある」は「気配がする」と置き換えても問題ないように思われ、(1a,b) から事態の変化値が大きく、開始点が明らかになり、物語を進める。(8)の時間関係は次のように図示できる。



以上のように HP 中の「とき」節には「夕」が内在されることが多く、MC から後ろに「とき」節の事態を見ることになるので、MC の事態より後に「とき」節の事態が生じることは少ない。一方、MC には事態の変化値の低い要素が多く見られたが、出来事を表す動詞などの要素が用いられれば、事態の変化値は大きく、開始点や終了点が明らかになり物語の時間は進行する。

3.2 「と」節

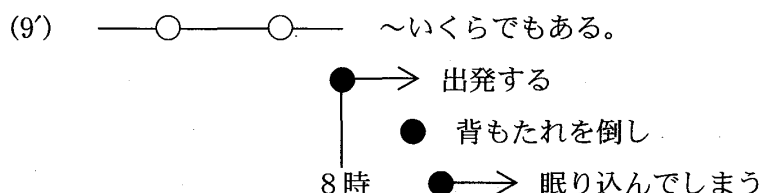
中村(2001)では、「と」自体に「と」節に表されている事態が MC の事態より前に生じる含意を持ち、「と」節には開始点や終了点の明らかな出来事が共起すると分析されている。

しかしながら、中村(2001)の分析と異なり、(9)は「開始点や終了点が明確な事態+「と」+MC (開始点や終了点が明確な事態)」、(10)は「開始点や終了点が明確な事態+「と」+MC (開始点や終了点が不明な事態)」、(11)は「開始点や終了点が不明な事態+「と」+MC (開始点や終了点が不明な事態)」、そして(12)は「開始点や終了点が不明な事態+「と」+MC (開始点や終了点が明確な事態)」の4つの時間関係が存在する。

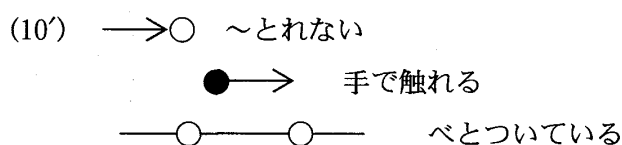
(9) ...時間なら、今の僕にはそれこそいくらでもある。夜の8時過ぎにバスターミナルを出発

- すると、僕はシートの背もたれを倒し、そのまま眠り込んでしまう。 (村上(2005a:24-5))
- (10)...しかしとれない。手で触れると、それは妙にべとついている。 (村上(2005a:144))
- (11) 行く先は四国と決めている。四国でなくてはならないという理由はない。でも地図帳を眺めていると、四国はなぜか僕が向かうべき土地であるように思える。 (村上(2005a:23-4))
- (12) お昼過ぎに庭を眺めながら食事をしていると、大島さんがやってきてとなりに座る。 (村上(2005a:218))

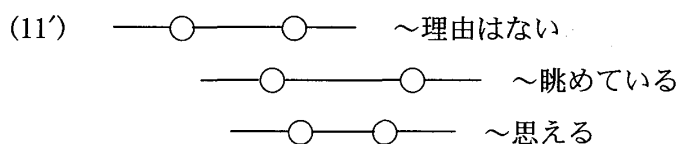
最初に(9)では、「夜の8時過ぎ」という時の副詞、「バスターミナルを出発する」の動詞の語彙アスペクト及び動詞の持つ項、そして「と」自身の持つ時間を進める含意から、事態の変化値が大きくなり、前文より時間が進んでいる。さらにMCの「背もたれを倒し」「眠り込んでしまう」は(1a,b)から、開始点・終了点が明確になり時間が進むため、下記のように図示できる。



2つめの(10)の「と」節の「手で触れる」が(1a,b)から開始点が明らかになり、かつ「と」の含意と共に前文より物語の時間を進めている。一方、MCの「べとついている」は進行相であり、事態の途中を示すため、聞き手は開始点も終了点も不明確で「と」節と同時となり、物語は進まない。

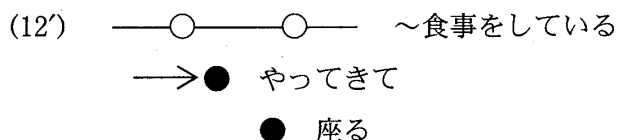


3つめの(11)の「と」節の「眺めている」は、進行相を持ち事態の途中を表し、事態の変化値は小さい。「と」自体の時間を進める含意にもかかわらず、前文より時間が進んでいるように解釈は出来ない。MC中の「思える」も(1a)から事態の変化が少なく、開始点・終了点も明確にならないので、「と」節と同時となり時間は進行しない。



4つめの(12)は、MCの「やってきて」「座る」という動詞の語彙アスペクトから、事態の変化

値が大きく開始点や終了点が明確になるにもかかわらず、(1k) から「と」節の「食事をしている」という前文の時間の中に内包されてしまい、「と」節と同時にになる。したがって、次の(12')のように図示される。



「とき」がそれ自体に MC の事態との同時性を含意しているので、HP では時間を進めるために「と」が多く用いられる可能性はある⁶。しかし「とき」節とは異なり、「と」節は「ル」形が内在されるので、途中又は前方に見せるという特徴が出てくる。時制としては事態の変化がかなり少ない要素となっている。さらに「と」は他の要素より物語の時間の進行に関して重要度が高いとは言えず、(1)で示した要素から事態の変化値を分析しながら聞き手は時間の進行を評価している。

4. まとめ

本論では HP の WC と「とき」及び「と」節の物語の進行の機能について分析してきた。過去形に挟まれた部分としての HP ならば、樋口 (2006) のようなシナリオ的な扱いでも良いが、本論の引用文献のように全文または、ある章の全てが現在形で描かれている場合は、違和感がある。

書き手が現在形を使えば、読み手は語り手と同時間を示すと解釈し、HP では語り手と読み手が時間的同位置にいて、(1)に示したように時制以外の要素から事態の変化を読み取り、開始・終了に焦点を当て時間の進行を認識する。

また、HP の現在時制による開始点・終了点の不明確性を補い、物語の時間の進行を進める重要な要素が (1a,b) の動詞の意味に関連するとすれば、やはり英語に比べて日本語は、事態に変化を与える他動性は低く、物語の時間の進行は遅いと言える。

注

- 1 本論では書き言葉の物語での HP を分析する。また時の接続詞「when」、「とき」、「と」を分析対象とし、それぞれの持つ原因・理由や条件などの意味は分析の対象外とする。
- 2 詳しくは Fujiwara (1991, 1995) を参照のこと。
- 3 ○は事態の開始点又は終了点が不明確なことを、●は明確になることを表す。また、事態の生じる時間が短い場合は、●一つで表す。→ は事態の開始や終了を示す。
- 4 藤原 (2004, 2007) を参照のこと。
- 5 池上 (2003, 2004) でも同様の考えが見られ、日本語の語りの現在は、語りと共に常に更新され続ける相対時制であり、英語の語りの現在は、発話時の一点にとどまる絶対時制であると述べ

ている。

6 村上(2005a,b)では「と」節の例が 27 例あったのに対し、「とき」節は 14 例であった。

引用文献

Coetzee, John Maxwell (1980) *Waiting for the Barbarians*, Penguin Books, N.Y.

村上春樹(2005a)『海辺のカフカ(上)』新潮文庫, 東京.

村上春樹(2005b)『海辺のカフカ(下)』新潮文庫, 東京.

Murakami, Haruki (Grabriel, Philip (translation)) (2005) *Kafka on the Shore*, Vintage, London.

参考文献

Declerck, Renaat (1997) *When-Clauses and Temporal Structure*, Routledge, London.

Fujiwara, Masamichi (1991) *Temporal Relations in Narrative Discourse*, MEd thesis, Univ. of Tsukuba.

Fujiwara, Masamichi (1995) "On the Temporal Structure of Historical Present," 『筑波英語教育』16号, 83-96.

藤原正道 (1999) 「時間の進行と日本語と英語の歴史的現在について」『実践女子大学文学部紀要』第41集, 61-72.

藤原正道(2004)「When 節と物語の時間の進行について」『実践女子短期大学紀要』第25号, 7-18.

藤原正道(2007)「歴史的現在中の when 節と物語の時間の進行」『英語と文法と：鈴木英一教授還暦記念論文集』221-232, 開拓社, 東京.

樋口真理子(2000)「ル・タ・テイルの意味機能試論：認知文法の見地から」『九州工業大学情報工学部紀要』第13号人文・社会学編, 1-40.

樋口真理子(2001)「日本語の時制表現と事態認知視点」『九州工業大学情報工学部紀要』第14号人文・社会学編, 53-81.

樋口真理子(2006)「「語り」の現在形」『九州工業大学情報工学部紀要』第19号人文・社会学編, 9-50.

池上嘉彦(1986)「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」『語り：文化のナラトロジー』(記号学研究6) 東海大学出版会, 東京.

池上嘉彦(2000)『「日本語論」への招待』講談社, 東京.

池上嘉彦(2003)「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(1)」『認知言語学論考 No.3』山梨正明他(編), ひつじ書房, 東京.

池上嘉彦(2004)「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(2)」『認知言語学論考 No.4』山梨正明他(編), ひつじ書房, 東京.

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房, 東京.

松村端子(1990)「会話の中の歴史的現在」『北九州大学文学部紀要』42号, 25-43.

- 松村端子(1996)『日英語の時制と相－意味・語用論的観点から－』開文社, 東京.
- 中村ちどり(2001)『日本語の時間表現』くろしお出版, 東京.
- 中村芳久(編)(2004)『認知文法論Ⅱ』(シリーズ認知言語学入門第5巻), 大修館, 東京.
- 大堀嘉夫(編)(2004)『認知コミュニケーション論』(シリーズ認知言語学入門第6巻), 大修館, 東京.
- Sakita, Tomoko I. (2002) *Reporting Discourse, Tense, and Cognition*, Elsevier, London.
- Wolfson, Nessa (1979) "The Conversational Historical Present Alternation", *Language* 55, 168-182.
- Wolfson, Nessa (1982) *CHP: The Conversational Historical Present*, Foris, Dordrecht.
- 吉川千鶴子(1995)『日英比較 動詞の文法：発想の違いから見た日本語と英語の構造』くろしお出版, 東京.